

博士学位論文概要書

「斜めの誠実」——南北戦争とエミリ・ディキンソン

金澤 淳子

## 序論

エミリー・ディキンソンと南北戦争の関係を考察する研究が本格的に始まったのは1980年代である。1984年に相次いで発表された3つの論考——シーラ・ウォルスキーの *Emily Dickinson: A Voice of War*、バートン・リーヴァイ・セント＝アーマンドの *Emily Dickinson and Her Culture: The Soul's Society*、カレン・ダンデュランドの “New Dickinson Civil War Publication” ——は、それまでの「隠遁詩人」像を覆す先駆的存在である。その後も数多くの論考が続き、近年ではフェイス・バレット、エライザ・リチャーズ、クリスタン・ミラーの3人が、同時代の文学や社会との関わりを検証しながら、精密な読みを具体的に展開している。

南北戦争の時代は、ディキンソンが生涯書いた詩の半分以上が集中する時期であり、ふたつの時期が偶然重なったのではなく、南北戦争の時代がディキンソンを詩人にしたという発想へと私たちを導く。仮に南北戦争が起きなければ、彼女の詩はかなり異なっていたに違いない。詩人を自覚し始めた30歳代前半に戦争を経験したからこそ、「詩人ディキンソン」が存在することになった、という見地から、本論では主に戦争直前の1858年頃から戦争の期間に書かれた詩を中心に考察する。

この時期にディキンソンの詩作を考えるうえでふたつの大きな疑問がある。ひとつは、ディキンソンの「戦争詩」が掲載された北軍支援の新聞において、同じ紙面に並ぶ他の作品や記事から浮いた印象を与えることである。なぜ、戦争とは無関係に見えるディキンソンの詩が掲載されたのかという疑問である。もうひとつは、ディキンソンは戦争と関係のある詩を送らずに手許に置いていた、回覧を巡る疑問である。ディキンソンが、友人や親戚に回覧した詩が、他人を介して新聞や雑誌、アンソロジーに掲載されながらも、戦争に関わる詩は送ることが差し控えられていた。このふたつの疑問から本論は出発した。ただし、戦争詩集を出版した同時代の詩人ウォルト・ホイットマンやハーマン・メルヴィルとは異なり、ディキンソンが「戦争詩」として意識して書いたかは不明であるため、本論では次の3つの観点から「戦いの詩」として論じる。

1. 戦いに関連した語やイメージが用いられた詩
2. 解釈の仕方によって南北戦争と関係づけて解釈することが可能な詩
3. ディキンソンが南北戦争に具体的に触れた詩、もしくは実際に戦争に触発されて書いた詩。

以上のように「戦いの詩」の射程を定めたいうで、詩人ディキンソンと南北戦争との関わりを考察する。

## 第1章 ディキンスンから「大佐」ヒギンスンへ ——南北戦争中の手紙を読む

戦争の最中、1862年4月にエミリー・ディキンスンとトマス・ウェントワース・ヒギンスンの文通が始まり、戦争中に送られた手紙として9通が残っている。本章では、戦争中にヒギンスンに送られた書簡を通して、詩人ディキンスンの戦争への姿勢を考察する。ヒギンスン宛ての書簡は、ディキンスンの書簡でも特異な位置を占める。それは、詩人としての姿勢で書かれているためである。文芸批評家として著名なヒギンスンではあるが、戦争中には軍人として出征しており、本章では特に軍人としてのヒギンスンの立場を意識しながら書簡を考察する。

ヒギンスンのエッセイ「若き投稿者への手紙」を、戦争を背景に読み直すと、そこにディキンスンの詩論・詩人論の詩へと結びつく表現を見つけることができる。不思議なことに、戦争に対する言及が初めて現れるのは7番目の手紙(L280)である。ヒギンスンの出征を知ったディキンスンが、戦争に対する姿勢を端的に表すとされる言葉「戦争は斜めの場所に思えます」(“War feels to me an oblique place -”)を書いた手紙である。当初は戦争への無関心の表れとされてきたが、手紙の中に戻して読むと、戦地にいるヒギンスンを配慮したものと解釈できる。

この7番目の手紙には、時代の主潮とは異なる、彼女自身の見方を示す箇所がいくつも散見され、「斜めの場所」(“oblique place”)という表現からは、同時代人とは異なる、ディキンスンなりの戦争との関わり方を捉えることができる。8番目の手紙には、戦場に関わる語彙が使われた詩“*That after Horror - that 'twas us -*”(F243)も付けられている。しかし、ヒギンスンに送ったのはこの詩の後半のみであり、神意への懐疑心が読み取れる前半部分は送られていない。また9番目の手紙は、眼科治療で滞在中のボストンから、負傷したヒギンスンに送られており、詩作に専念するディキンスンの姿が浮かぶ。ヒギンスンに送られたこれらの手紙においては、時代との関わりを示しつつも、時代の思潮に縛られることなく、自分なりの表現の可能性を探る詩人の姿を解釈できる。戦時下における「生」と「死」、それに伴う「苦しみ」に、「斜め」(“oblique”)の立ち位置から詩人として戦争に対峙しているのである。

## 第2章 定期刊行物に見る戦争詩とディキンスン

南北戦争の時期に、ジャーナリズムは飛躍的な発展を遂げた。人々が戦況を

求めたためであり、新聞購読数が急激に伸びている。ディキンソン家でもいくつかの雑誌と新聞を購読している。ディキンソンの詩は生涯で、再掲載も含めて18箇所に掲載されている。その3分の2を占める14回が、戦争中であり、北軍系新聞に再掲も含めて掲載されている。本章では、特に、北軍衛生委員会の日刊紙『ドラム・ビート』(*Drum Beat*) にディキンソンの詩が現れたことに注目する。南北戦争の時期はディキンソンの詩作が最も充実した時でもあり、新聞掲載の事実から、間接的ながらも時代に関わっていたことがわかる。しかし、先述したように、同じ新聞に掲載された他の詩や作品と較べると、ディキンソンの詩は、戦争とは無関係の印象を与える。

同時代の戦争詩で有名な例である、ジュリア・ウォード・ハウの戦争詩“*Battle Hymn of the Republic*”との違いは歴然としている。「国旗」「自由」「神」などのモチーフを使って、国家としての運命と戦争の意義を、信仰の正しさと結びつけて肯定的に表現している。一方、ディキンソンの詩は自然の情景を歌っている。戦争の時代とディキンソンの繋がり、そして、隔たりを考察するために、彼女が戦争に言及した手紙と、同じ頃にした詩、そして新聞に載った詩を取り上げる。特に、戦争に直接関係して書かれた2通の手紙と詩における表現を分析すると、ディキンソンの詩には、対象との距離の取り方を意識する言葉が見られる。同様の性質は、従軍看護師として戦争を体験したルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott) の *Hospital Sketches* においても見出すことができる。オルコットは戦争の恐怖を扱う際にユーモラスな筆致を用いており、戦争の衝撃を和らげる方法として不可欠な距離を取ろうとしている。ディキンソンにあっては、オルコットが「不快なもの」とした「陰」の部分、否定して退けることはせず、むしろその部分に向き合って、詩を書いている。

### 第3章 ディキンソンと「読者」 ——南北戦争時に「送られた」詩

戦争に直接影響を受けて書いた詩、または関係しているものと解釈可能な詩を、ディキンソンは友人や親類に送らず、手許に置いていた。この問題についてクリスタン・ミラー、フェイス・バレット、そして近年ではコーディ・マーズが考察している。本章では彼らの議論をさらに深めて、送った詩と送らなかった詩のふたつを同じ視野に入れて論じる。その際に、読者の存在についても問題意識を提示しながら進める。19世紀アメリカでは、大都市から、開拓が進む西部の小さな町に至るまで数多くの雑誌が登場した。こうした雑誌には、種類に関わらず必ず詩が掲載された。人々の暮らしに詩が密接に関わっていた証

である。

ベッツイ・アーキラ等は、ディキンソンが詩を送った相手が「社会的・文化的に最も影響力のある同時代人」であると述べ、ディキンソンが想定する読者の排他的な面を指摘している。しかし、戦争期における、新聞読者もまた考える必要がある。戦争中は、ディキンソンの詩が何度も新聞に掲載された時期だからである。北軍系の新聞に現れたいくつかの詩は、戦争前に書かれたものである。戦争とは無関係に書かれながらも、何度も転載された。友人や親類の手を離れて、未知の読者の目に触れた時、ディキンソンの詩はどのような受け止め方をされるのか、その可能性を探るうえで、具体的に、“Flowers - Well - if anybody” (F 95) の詩を例に挙げたい。この詩は 1864 年 3 月前半の 2 週間で次々と 4 紙に掲載されている。戦争前に書き、友人（兄の妻であり親友のスーザン）に送った詩でありながら、“St Domingo” の語が用いられており、黒人の反乱・革命が起きたハイチを想起する解釈が今や指摘されている。ディキンソンが 1859 年にこの詩を作り、送り先のスーザンの計らいで、スーザンの自身の友人のネットワークで回覧された。それが編集者の手に渡り、何度も転載されていくにつれ、最初に送ったときのディキンソンの意図とはかけ離れた意味が、独り歩きした可能性を、この詩に見ることができる。

#### 第 4 章 南北戦争時に「送られなかった」詩

本章では、戦争に直接関係して書かれた詩、または戦争に関わると解釈できる詩が、ほとんどが送られなかったことについて考察する。これらの詩を分析するうえで、同じ時期に書かれた手紙と比較する。どちらも、アマスト出身の青年フレイザー・スターンズの戦死を機に書かれ、類似した表現が使われている。だが、手紙 (L 256) は友人のサミュエル・ボウルズに送られ、詩はディキンソン本人の手許に置かれた。手紙では兄が受けた衝撃を書いているが、ディキンソン本人の心情にほとんど触れていない。一方、“It dont sound to terrible - quite - as it did -” (F 384) の詩では語り手が受けた強い衝撃が書かれている。衝撃を克服する方法を思案する内容だが、選択肢として宗教に何ら触れていない。これは、スターンズの父が、息子の死を神意として受け止める回想録の文章とは全く異なる。

手許に置かれた他の詩に、母と戦死した息子を扱った詩 (“When I was small, a Woman died -” F 518) があり、兵士の死に対して懐疑的な語り手を読み取ることができる。また、戦場の詩 “If any sink, assure that” (F 616) では、悲しみや苦しみという感情すらも超越した、乾ききった言葉が並ぶ。これらの詩を書いたき

っかけかは定かではないが、どれも何かに突き動かされるように、書かずにはおられずに書いたかのような詩が手元に置かれている。

戦争に直接・間接に触発されてディキンソンは詩を書いた。だが、誰にも送らずに手元に残した。ディキンソンは表向きには、戦争について同情的な表現や行動をとることを控えていたものと推測できる。例えば、ボウルズに宛てた手紙 (L272) では、戦場に持って行く花束を兵士に所望されたことを、皮肉交じりに書いている。しかし一方で、やむに已まれぬ気持ちで戦争に関わる詩を人知れず書いている。前章で見たように、南北戦争の期間は、ディキンソンの詩が生前、最も新聞や雑誌に掲載された時でもある。友人や親戚に送られ、新聞や雑誌の読者の手許に届いた詩と、送られずにひっそりと置かれていた詩という、ふたつの対極の詩群が存在していたことになる。この対照的な詩群があることによって、ある種の平衡感覚が生じ、ディキンソンを支えていたとも考えられる。戦争下の過酷な現実、同時代の言葉を使いつつも、彼女自身の内なる世界を反映する詩を書いたのである。

## 第5章 戦争前の「戦いの詩」

シーラ・ウォルスキーやダニエル・アーロン等は、南北戦争をきっかけに、ディキンソンは戦いの言葉を用いるようになったと述べている。ところが、戦争前の1858年から1860年の時期に、すでに戦いの用語を使っている。この事実注目し、本章では、ディキンソンが戦争前に書いた「戦いの詩」6篇を取り上げる。

セント＝アーマンドは、ピューリタニズムの伝統において戦闘の用語が比喻として用いられた歴史背景を指摘している。戦争前に、戦いの用語を使ってディキンソンが書いた詩のひとつに“Bless God, he went as soldiers” (F 52) がある。讃美歌と同じ普通韻 (common meter) で書かれ、伝統的な形式を使いながらも、伝統的な主題展開とは異なる。同じアマスト出身で幼馴染の詩人・小説家ヘレン・ハント・ジャクソンの詩“Triumph”と、ディキンソンの戦いにまつわる詩“To fight aloud is very brave -” (F 138) を較べると、類似した設定が見られ、英雄的な戦士と、誰にも知られず胸の内で戦う戦士というふたりの戦士が対置されている。後にヒギンソンとメイベル・ルーミス・トッドが編集し、出版した際に、この詩に“Triumph”というタイトルをつけている。ただし同じ主題の詩でありながら、展開は異なる。ジャクソンの詩ではどちらの戦士も勝利を手にする。だが、ディキンソンの詩では、最終的に報酬を得たかどうかは不明のままである。ピューリタニズムの影響が色濃く残るアマストで共に同じ年に生まれ、同

じ時代を共有したふたりではあるが、主題の展開は異なる。

1858年から1860年は、ディキンソンが詩人としての意識を持ち始めた時でもある。草稿集 (Fascicles) を作り始めてもいる。そうした時期に書かれた「戦いの詩」では、人知れず苦悩する者、戦いに敗れて瀕死の状態の者、試練に向かう者など、どれも報酬には無縁の姿が登場する。伝統において受け継がれてきた語彙を用いながら、敗者の立場を歌う。これらの詩は彼女自身の姿を投影したものとしても解釈できる。だが、南北戦争の時代になると、本物の殺戮が行われ、その途方もない事実でディキンソンは突き動かされ、戦争に関わる詩を書くことになる。

## 第6章 声なき者たちの声

### ——ディキンソンと「殉教者たち」

本章では、解釈によって南北戦争と関係づけることが可能な詩を扱う。またディキンソンを同時代人の中に位置づけて論じるうえで、1859年に起きたジョン・ブラウンのハーパーズ・フェリーの襲撃を取り上げる。ヘンリ・デーヴィッド・ソローはブラウンと面識があり、彼を擁護しているが、ブラウンとディキンソンは直接の接点はない。しかし、デーヴィッド・S・レノルズは、ブラウン評伝において、周囲の人間関係からふたりを結び付け、ブラウンのラディカルな気質とディキンソンの詩人としてのラディカルな気質を結びつけている。

襲撃当初、ブラウンは新聞では“mob”と記されたが、処刑のときには“martyr”と変化した。戦争中は戦死した兵士は「殉教者」として称賛され、その例として *Springfield Republican* の追悼文を挙げるができる。そこでは戦死した兵士を「殉教者」として称え、さらなる収穫をもたらす「種」に喩えている。類似した「種」の比喩は、ソローやスターンズの父、同時代の詩人たちが用いている。ディキンソンも「種」の比喩を使って詩を書いているが、兵士や戦士ではなく、女性詩人とも解釈できる人物が復活を待つ。

ディキンソンの詩 “Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) では、ブラウン処刑時に同時代の作家や詩人たちが用いた語、“meteor” と “martyr” がやはり用いられている。この詩は、殉教者たちの堅固な信仰心を反映するかのようには整った韻律で進む。だが、途中で韻律が乱れ、場面も極端に変化する。この殉教者たちの中に、語り手の詩人自身の姿を読み込むことができる。ボウルズに送られた手紙 (L 251) でも、同じ詩が使われ、そこではディキンソン自身の歩みとなっている。この詩の延長線に “The Martyr Poets - did not tell -” (F 665) を置いて読むと、ディキンソン自身が目指す「殉教詩人」を捉えることができる。

同時代の詩人たちは、殉教者たちを詩に書き、次々と発表した。だが、「殉教詩人」ディキンソンは、詩を同時代人と共有せず、“mortal”な身でありながら“immortal”なメッセージを詩に託し、未来の読者に伝えることを使命としたのである。

## 第7章 言葉の軌跡

南北戦争からディキンソンはどのような影響を受けたのか。この問題を最後に考察するうえで、これまで扱った戦いに関わる詩および、詩の送り方の変化を確認する。まず、戦前に書かれた戦いの詩は、心に抱える悩みや試練が、敗者の立場で描かれ、勝利や報酬とは無関係のまま終わる。だが、戦争中になると、勝敗にまつわる視点や敗者への共感はやがて見られない。この時期の詩は、戦争の時代の様々な局面を取り上げ、衝撃や恐怖、罪悪感、死者に対する思い、兵士の立場などを描いている。こうした詩作を経ながら、ディキンソンは詩を書く意義を探って行ったものと考えられる。その通過点として“The Battle fought between the Soul” (F 629) がある。この詩は、内面の戦いを描いたものであるが、“It feels a shame to be Alive -” (F 524) に見られる罪悪感はない。また“The Battle fought between the Soul” (F 629) の詩では、内面の戦いも、戦争の戦闘のひとつに捉えている。さらにこの詩は、新聞や雑誌が取り上げぬ心の内面を注視している。ホイットマンやメルヴィルが歴史の表舞台の戦闘を基に戦争詩を書いたのに対して、ディキンソンは、戦況報道とは異なる「速報」にも目を向ける。“The Birds reported from” (F 780 A) もその一例で、語り手は鳥の「速報」に時代の不穏な空気を感じ取る。

詩の記録と回覧の変化について見ると、戦前の1858年頃からディキンソンは草稿集を作り始め、1864年で作業を止めている。詩の回覧も、クリスタン・ミラーの分析によれば、スーザンに詩を渡す割合が、詩を最も多く書いた戦争中に極端に減少する。戦争の時代にあって、回覧することよりも、書きたい詩を極めることを優先したためであったと考えられる。最後の40番目のファシクルズに清書された“A nearness to Tremendousness -” (F 824) にひとつの到達点を見出す。心の苦悶を描くうえで抽象的な切り詰めた表現が用いられ、戦前の戦いの詩とは大きく異なる。新聞や雑誌、文通を通じて時代と結びつくディキンソンは、マスメディアが取りこぼした部分をも掬い上げて詩を書いた。そこにはディキンソンがこだわる「斜めの」(“oblique”) 姿勢を見出すことができる。



## 終章

南北戦争後 15 年を経て 1880 年に、ディキンソンは “The Robin is a Gabriel” (F 1520) を書いている。北米でお馴染みのコマツグミを詩人の分身として書いた詩である。その際 “oblique” の語を用いている。“oblique” の語は “Some we see no more, Tenements of Wonder” (F 1210) でも使われており、この世の人間の認識の限界を表している。また、ヒギンソンへの手紙で用いられた “War feels to me an oblique place -” (L 280) においても、未知の場所として戦争を捉える用い方であった。それに対して、“The Robin is a Gabriel” (F 1520) では、コマツグミの立場から、つまりは詩人の立場から、その表現方法を語るうえで “oblique integrity” と使っている。未知のものを捉えるうえで、対象との隔たりを認識することが出発点にあることを示す。詩人自身が自分に対する「誠実さ」を貫く姿勢がここに見られる。

戦争の時代を通してディキンソンが辿り着いたのは、把握し難いものを突き付けられたときにそれを捉えようとする挑戦といえる。未知の対象との隔たりを、つまりは「斜め」の認識を認めることは、詩人が自分自身に対する「誠実」を意識しているからこそなのである。ディキンソンは時代との繋がりを求めながらも、表現においては、敢えてその繋がりを断ち、自分自身にとって偽りのない言葉を連ねたのである。